安倍政権を終わらせ希望ある政治へ

五十嵐　仁（法政大学名誉教授・法政大学大原社会問題研究所元所長）

〔以下の私の発言は、10月19・20日に神戸で開かれた「地域・職場・青年革新懇全国交流会in兵庫」でのものです。〕

全体会　閉会あいさつ

どうも、ありがとうございました。以上をもちまして、会場からの発言を終わらせていただきます。

本日の参加者は、45都道府県から１８３０人の方になりました。これまでで最多の参加者で、交流会が大きな成功を収めたことを確認し、共に喜び合いたいと思います。

ここで一言、閉会にあたってのごあいさつをさせていただきます。「あってよかった革新懇」「今が出番の革新懇」「共闘の要は革新懇」。この３つが、今日の報告と発言を通じて明らかになったのではないでしょうか。革新懇運動をやっておりますと、確信がコンコンと湧いてまいります。これは、シャレではなく事実ではないでしょうか。

この間、政治の景色、光景が変わってまいりました。市民と野党の共闘は、もはや当たり前のことになっています。これに共産党が推進力として加わるというのも当然のことになっている。「共産党を除く」という壁が、除かれたわけでございます。

私たちのパートナーになっているさまざまな政党、あるいは団体の方も、ある種の「食わず嫌い」がありました。私たち自身もそうだったかもしれません。自分の周りの方とだけ付き合うという傾向が強かったのではないかと思います。

しかし、この間、お互いに食べたり食べられたりしてきた。食べてみたら意外においしいじゃないか。それだけでなく、栄養もあるしエネルギーも出るということが、実感を持って確かめられてきたのではないでしょうか。

今日の皆さんの発言でも、その一つひとつに共闘のリアルな姿が示されました。ここで学んだことを持ち帰って、解散・総選挙がいつあっても戦えるような、草の根からの力を作り上げていこうではありませんか。

２年以内には解散・総選挙必ずあります。心配しなくていいですよ。任期はあと2年しかありません。安倍さんは、「解散する、解散する」と脅そうとするでしょうけれど、恐れることはありません。「やれるものならやってみろ、返り討ちだ」という気概で、受けて立とうではありませんか。

ここまでが閉会のあいさつでございます。今日の交流会には、兵庫革新懇と賛同団体の方およそ１００人もの要員にご協力いただいております。スムーズな運営に対して、大きな拍手で感謝の意を表したいと思います。

それでは、以上をもちまして全体会を閉じさせていただきます。ご参加、ご協力に心からお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

まだ終わりではございません。これからは業務連絡でして、発言を希望されて発言できなかった皆さんには、ぜひ明日の分散会、分科会で発言をしていただくようお願いいたします。とりわけ市民と野党の共闘につきましては、私、分科会のコーディネーターもやっておりますので、どしどしご発言いただきたいと思います。明日の分散会、分科会も豊かな発言で大きく成功させましょう。どの分散会、分科会に参加するのか、名簿はロビーに掲示してあります。各

県革新懇事務局にもお渡ししてあります。どの分散会に参加するのか、ご確認ください。
なお、お帰りの際、感想文の提出にも、ぜひご協力いただきますようお願い申し上げます。それでは、以上で終わります。お忘れ物のないように気をつけてお帰りください。どうもご協力ありがとうございました。

「共闘」分科会：開会あいさつ

研究の対象から実践の課題となった統一戦線

ただ今から、シンポジウム「市民と野党の共闘で政治を変えよう」を開会いたします。よろしくお願いします。司会兼コーディネーターということで、私が仕切らせていただきます。コーディネーターというのは〝こうでねえか〟という感じで進めたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。
この間、全国で市民と野党の共闘が大きく発展、前進してまいりました。このような経験を背景にしまして、その経験を持ち寄り互いに教訓を学びあおうということで、たくさんの方にお集まりいただいています。大変多くの方から出席のお申し出をいただきまして、ありがとうございました。

さて、共闘というのは統一戦線の萌芽でございます。私事にわたり誠に恐縮ではありますが、最初に私と統一戦線との関わりについて述べさせていただきたいと思います。
私の修士論文の題名は「コミンテルン初期における統一戦線政策の形成」というものでございました。法政大学大学院で、『統一戦線史序説』を書かれた故中林賢二郎先生の指導を受けました。東京都立大学で塩田庄兵衛先生に師事した縁で、法政大学大学院の中林ゼミに進んだわけです。
もう時効だと思いますので、ここで明らかにしたいと思います。この中林先生に紹介されまして、実はアルバイトとして共産党の野坂参三元名誉議長の自伝執筆のお手伝いをいたしました。その結果は『風雪のあゆみ』第7巻と第8巻にまとめられております。その際、人民戦線政策を打ち出したコミンテルン第7回大会の様子について、つぶさにうかがうことができました。
その後、大学院を卒業して法政大学大原社会問題研究所に就職するわけですが、そこに在籍していたとき2カ月間、中国に短期留学いたしました。そのときのテーマが「中国共産党と抗日戦争についての調査」ということで、中国全土を1カ月間かけて旅行いたしました。
この旅の途中、張学良が蒋介石を襲って共産党との共闘を求めた「西安事件」の舞台を訪問しました。蒋介石の宿舎のあったのが華清池です。ここは楊貴妃と玄宗皇帝のラブロマンスの舞台でもありますが、この華清池に建っている五間庁という建物に蒋介石は宿泊していました。

五間庁にはまだこのときの弾痕が残っていました。この「西安事件」を契機に第２次国共合作が成立し、その後の中国革命の趨勢が決められていくことになります。

また、その後、アメリカのハーバード大学に客員研究員として留学した後、地球を一周して世界の労働資料館と労働組合を調査いたしました。私、旅行が好きなものですから、調査を名目に、あっちに行ったり、こっちに来たりしていたわけです。このとき三十数カ国を訪れ、ヨーロッパも訪問しました。フランスやスペインなど人民戦線の現場にも行く機会がありました。このように、私の学究生活は統一戦線の研究と切っても切れないものであったと言っていいだろうと思います。

しかし、２０１５年に状況は一変いたしました。安保法制（戦争法）に反対する運動の中から、「野党は共闘」という声が挙がったことは、皆さんよくご存じのとおりであります。私にとってもひとごとではなく、翌２０１６年1月の八王子市長選挙に、市民と野党の共同候補として立候補したといいますか、させられたといいますか。その辺は大変微妙ではございますが、最終的には「担ぐ神輿がなければ祭りは始まらない」などと言われまして、立候補を決意したわけです。これは参議院選挙に向けての「5党合意」が成立する1カ月前の選挙であったということを、ここで強調しておきたいと思います。

すでに沖縄では「オール沖縄」という形で市民と野党の共闘は始まっておりました。けれども、まだ本土ではそういう形になっていませんでした。八王子からそのような市民と野党の共闘という形での選挙を戦うことで、そのような機運を盛り上げたいと思ったわけです。八王子から統一戦線結成に向けての先鞭をつけるのだという演説をして市長選挙を戦いました。このとき、私にとりまして統一戦線という問題は、研究の対象から実践の課題に変わったわけです。

その後の市民と野党の共闘の進化・発展は、皆さんご承知のとおりでございます。このシンポジウムはその実践を振り返り、経験から学び、教訓をくみ取ること。これが大きな課題になっております。今後2年以内には必ず総選挙が実施されます。衆議院議員の任期は再来年の10月までです。人気があってもなくても任期満了。議員を辞めなきゃならないということになっております。それを見据えて、市民と野党の共闘をどう発展させていくのか。豊かな報告と多彩な発言を期待したいと思います。

ここにお並びの報告者には、参議院選挙の結果をどう見るか、市民と野党の共闘の到達点と課題、安倍改造内閣が発足しましたけれども、この内閣の評価、野党連合政権についてもどうなるのか、どうすべきなのか、この見通しと課題などについて、それぞれの立場から自由に語っていただければと思います。また、革新懇の課題などについても言及していただければ幸いです。

発言の順番は、あいうえお順ということで、全国革新懇の代表世話人でもあり、市民連合運営委員、総がかり行動実行委員会共同代表など、たくさんの肩書きがありますが、小田川義和全労連議長から、労働運動や社会運動に深く関わり市民と野党の共闘の内部でその推進のために努力をされてこられた経験から、ご発言いただきたいと思います。

次には、日本共産党国会対策委員長である穀田恵二衆議院議員から、現在の国会の状況や、国会内での野党共闘ということもかなり前進しているというお話がきのう志位委員長からもありました。その状況や今後の野党共闘に向けての政党間協議、大まかなことはすでに志位委員長に話をされてしまったということをおっしゃっていますけれども、ちょっとこぼれたところを、打ち合わせなどでのエピソードなどもありましたらお話しいただければと思っております。

3人目は、政治学者で関西学院大学の副学長をされておられるそうですが、冨田宏治教授から、市民連合や関西の状況、草の根での共闘のあり方、あるいは現状と今後の課題などについてご発言いただければと思っております。

最初のご発言は1人20分ということでお願いしてありますが、これだけたくさんの方がひとこと何か言いたいということで来られたのではないかと思われますので、できるだけ多くの方に発言していただきたい。20分は最大で、短くても良いということでご発言いただきたいと思います。

報告者の方の発言が終わってから休憩を取ります。15分ほどの休憩を取りますので、その間に、ご報告や活動などについて質問などがありましたら、質問用紙をお配りしますので、それに記入して提出していただきたいと思います。

その後、フロアからの発言をお願いいたします。これは大体1人5分間ということです。これもできるだけたくさんの方にご発言いただきたいという趣旨です。とうとうと演説される方がたまにおられますけれど、それは別の機会に、別の場所でやっていただくということで、ここでは端的、明瞭、かつ簡潔に、5分程度で話をしていただければと思います。今から準備をしておいてください。

それでは、最初に小田川全労連議長から、ご報告をよろしくお願いいたします。

まとめ：「市民と野党の共闘」の進化・発展

ここで結びの言葉を兼ねて、市民と野党の共闘の進化・発展についてお話をさせていただこうと思っておりますけれども、きのうも全体の交流会の司会をやりまして、閉会のあいさつをやってるんですね。これから結びの言葉を述べようと思ったときに、どうも同じことを言いそうだなと。かといって、まったく違うことを言うわけにもいかない。いくつかの点で少し重なるかもしれませんので、あらかじめお断りしておきたいと思います。

1つは、皆さんのご報告とご発言をうかがいまして、昨日も同じようなことを言いましたが、

政治の光景が変わってきていると実感しました。市民と野党の共闘というのが当たり前の光景になってきた。この共闘の中で共産党が大きな役割を演じ、推進力を発揮するという形で加わってきた。こういう光景は自然にそうなったのではなくて、私たちが変えてきたから光景が変わったんだということなんですね。これを変えてきたのは私たちであり、皆さんであったということを、まず共に確認しておきたいと思います。

ここに穀田さんがおられますけれども、共闘の枠組みに共産党がどう関わるかが問題とされてきた。しかし、それはもう過去の話。先ほど反共主義という話もありましたけれども、「共産党アレルギー」がありました。今は「共産党エネルギー」ですね。アレルギーということで毛嫌いされるような状況が、エネルギーとして頼りにされている。高知では「ぜひ立ってくれ」とお願いされるような状況になってきている。各地で市民と野党の共闘を動かす、推進する力、機関車としての役割を果たすようになってきている。もっともっと変えていかなきゃならない。そのための目標はできたし、そのためにどうやればよいのかということも、昨日と今日の議論を通じて、いろいろな教訓を学ぶことができたのではないでしょうか。

これをそれぞれの地域、職場、地方に持ち帰って、さらに大きく政治の光景を変えていく。こんなに希望の持てる、そういう政治があるんだということを知らせる。多くの国民が実感できるような、絶望から希望に変わっていけるような、そういう政治の道を切り開いていくことを、これからの課題として考え、実行していく必要があるだろうと思います。

２つ目の問題として、市民と野党の共闘はかつての「社共共闘」の単なる再現ではないということです。60年代後半から70年代初めにかけて、特に革新自治体などで社共間の共闘が進みました。それとの違いと発展があるということです。社共共闘の場合は、総評を仲立ちに社会党と共産党が手を組むという、政党間の連携が主導する形がほとんどであったわけですね。そして、政党や労働組合の系列の団体が勢ぞろいして共闘体制を組んだり、選挙を戦ったりという形になっていました。

しかし今は、労働組合はもちろん大きな役割を果たしておりますけれども、それとともに市民がさらに大きな役割を果たすようになってきている。草の根での運動と連携が進んでいます。小田川さんのお話では、市民連合といっても人・金は不足しているというお話でしたけれども、不足っていうことは足りないっていうことです。運動が進んでいなければ、足りないっていうことも問題にならない。それが問題となり課題になっているということは、草の根で市民の運動や組織化が大きく発展し進んでいるということの証拠であろうと思います。

このような市民団体とともに、個人のイニシアチブも大きい。これが特徴ではないかと思います。革新懇も地域で草の根でのイニシアチブを発揮していく。今まで以上に、草の根の根を深く、広く張り巡らしていかなければなりません。それがこれからの政治の革新と野党の連合政権を支える大きな力になっていくのではないかと思います。

３番目に言いたいことは、これは穀田さんも強調しておられましたけれども、過去を問うこ

となく、手を結ぶということです。過去を問うたら、一緒にやれる人はあまり居なくなっちゃうんじゃないか。とりわけ2年前の総選挙のとき、東京都知事の小池さん、「希望の党」を立ち上げることによってわれわれの希望を打ち砕いてしまった。「小池にはまって、さあ大変」、選挙情勢が激変して大混乱という状況が生じました。あっちに行ったりこっちに来たりという方がたくさん生まれたわけです。

しかし、これからの共闘に当たって、相手を好きだ、嫌いだなどと言うぜいたくは許されない。そんなことを言っていられるような状況ではありません。好き嫌いをなくす。昨日私は、食べず嫌いは駄目だという話をしましたけれども、食べず嫌いなしで好き嫌いも言わず、なんでもおいしくいただこうということです。そうすれば、栄養も付くしエネルギーも湧いてきます。

というのは、私は都立大学時代に全共闘を名乗る暴力学生の旗竿によって右目を突かれて失明するという事故といいますか、事件に遭遇いたしました。右目があるように見えるかもしれませんが、私の右目はプラスチックの義眼でまったく見えません。20歳のときから左目しか見えない。先ほどからの司会でも、誰か手を挙げてもよく分からない。視界不良です。後ろのほうだと、よく見えない。しかも、右目が義眼ですから、左しか見えない。どうも左ばかり見る傾向が、このころからあったんじゃないかと思います。

しかし、暴力学生であった方であろうとも、今、安倍内閣と対決するんだというのであれば手を結ぶ。先ほど冨田さんがおっしゃいましたけれども、若者は病んでいる。若者だけじゃないんです。病んでいるのは、この国の政治そのものです。政治のあり方が、安倍首相によって腐らせられてしまっている。これをなんとかしなきゃならない。この一点で一致できるのであれば、そして暴力はふるわない、かつてやったことは反省しているということさえ確認できれば、恩讐を越えて共に手を組もうということを、私はいろんな所で訴えてきました。ここでも、このことを強調したい。

政治は変えられるし、変わるんです。人も変わる。中村喜四郎さんの話が出ましたけれど、今私、古賀誠さんの『憲法九条は世界遺産』という本を読んでいます。これは書評を頼まれたからです。まさか自民党元幹事長の本を書評するなんて、思いもよりませんでした。しかも評価する立場で。本当に、人生は生きてみなきゃ分からない。古賀さんは昔から憲法は大切だって言っていましたけれども、とうとうこういう本を書くようになった。

昨日は小林節さんが出席して、あいさつされました。私は政治学者ですから、小林さんの名前は昔からよく知っています。その主張は、私とは正反対でした。その向こう側に居た人が、気がつくといつの間にか横に居るんです。私が八王子市長選挙に立候補したときは、2回も応援に来てくれました。後ろから押し上げてくれたんですね。本当に人間というのは変わるもんだなと感動しました。政治も変わるし、人も変わる。これらの変化を、われわれの力にするということが共闘の大きな意味であり、役割ではないかと思います。

最後に、これからの「あり得るシナリオ」について、ひとこと言いたいと思います。ことしの参議院選挙を見ていて思い出したのは、１９９２年７月の参議院選挙です。この年の５月に、細川護熙元熊本県知事が日本新党を立ち上げました。大きなブームを呼びまして、２カ月後の７月の参議院選挙で一挙に４人の議員を誕生させた。その後もブームは続き、翌１９９３年７月の総選挙で35人の議員を誕生させ、自民党を政権の座から追い落とすことに成功しました。これで55年体制は崩壊したわけです。８つの政党・会派を糾合して野党連合政権を樹立し、細川さんは首相になりました。同じようなシナリオが、これから来年にかけてあり得るのではないか。それを目指そうじゃないかということを、私は皆さんに呼びかけたいと思います。

この93年の政権交代、２００９年にも民主党を中心に政権交代がありました。しかし、今めざしている野党連合政権は、３つの点でこれらと大きな違いがあります。

１つは、政権樹立をめざしている市民と野党の連合の中に、共産党が大きな推進力、エネルギーとして入っているということです。この点にも共闘の進化・発展の姿が示されています。

２つ目は、草の根ですでに準備が始まっているということです。それぞれの地方や選挙区で、野党の共闘が実現し、ダッシュに向けて着々と動きが始まってきている。過去には、このような動きはありませんでした。風頼みです。一時的な、いわば「追い風」に押し上げられるような形で政権が変わった。今回は風ではない。草の根からの力で政権を変える。

そして３つ目は、政策合意がすでにできているということです。最初は２０１６年の「５党合意」で４項目です。その翌年の総選挙で７項目、そして今回の参議院選挙で13項目についての合意がなされました。政策の幅が広がり、合意の水準も上がってきている。これが土台となって来るべき連合政権樹立に向けて野党間の政策を訴え、新しい政権の姿を明らかにする。これも準備ができている。準備は整った。これからは進撃を開始するのみ、ということになろうかと思います。

フロアからも発言がありましたけれども、新しい政権交代の形を私たちの力で示していく。改革者としての新しい試みを、開拓者精神を持ち勇気をふるって、新しい政治、新しい時代の扉を開く。そのジャンピングボード（跳躍台）に、この交流会がなれば本当にいいなと思います。将来、あのときから政権交代への動きは一気に加速したんだと振り返られるような、そのような場になったのではないかと思います。

今回のこの交流会、今日のシンポジウムの成功を皆さんと共に喜び合うことで、結びの言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。